

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2025年7月31日

A Midsummer Night's Dream / 真夏の夜のSF小説

今年も夏がやってきました。夏と言えば、スイカ、ヒマワリ、かき氷、海水浴、入道雲、夏祭り、花火、セミの声、SF小説ですね！…ん？何か異論がありますか。なぜにSF小説？と思った人も多いかもしれませんが、なんとなくミステリー小説は冬、SF小説は夏って感じがしませんか。

ディープなSFファンには及びもつきませんが、SF小説は好きで、若い頃からそこそこ読んできました。高校時代、明日から夏休みという一年で一番心おどる日、今は無き泉町の川又書店で厚めのハヤカワSF文庫を数冊買い込み、「よ～し、とりあえず夏休みの最初の一週間は、勉強も宿題も忘れて読みまくるぞー！」とワクワクしながら家路についた記憶があります(注1)。自分の中で「夏はSF」のイメージは、そんな経験が関係しているのかもしれません。

SFとは、サイエンス・フィクションの略です。日本語では「空想科学小説」などと訳されたりするようですが、文字通り、科学的な知識や世界観をベースに空想にもとづいて書かれた物語のことです。書店に行くと、実に多くのSF小説が並んでいます。小説のジャンル別作品数をランキング化したら、SF小説が相当上位に食い込むことは間違いありません。SF小説の描く無限の空想の世界は、それだけ多くの人の心をとらえ、魅了しているということなのでしょう。「宇宙英雄ペリー・ローダン」などという作品は、1960年代に誕生してシリーズ化されて以来、複数の作者がリレー形式で書きつなぎ、720巻を超えて今なお続編が書かれていることです。こんな小説、いったいどのどんな人が読んでいるのだろう？

自分がSF小説と出会ったのは、小学4年生の夏休みのことでした。初めて読んだ作品は『夜明けの惑星』。タイトルもストーリーもぼんやり覚えています。本文を書くにあたりネットで検索してみたら、「集英社ジュニア版世界のSF第3巻」で、パイパーというアメリカの小説家が書いた作品であったことがわかりました。

惑星ドルーシャからの宇宙開拓団は惑星タリーシュを目指していましたが、到着を目前に宇宙船が隕石群に衝突し、タリーシュに不時着します。生き残ったのはわずか8名の男女のみ。タリーシュには猿と人間の間のような原始人類「毛深族」が生息、繁栄していました。8名は優れた武器と装備、科学力で毛深族の脅威に対抗しますが、1人また1人と命を落としていきます。しかし、一方で8人の子孫にあたる新しい命も誕生し、徐々にドルーシャ人たちは数を増やしていきます。彼らはやがてタリーシュの環境に適応し、獣の毛皮を衣類とし、石や木、動物の骨を加工して道具を作り、ついには毛深族を圧倒していくのでした…というのが『夜明けの惑星』のあらすじです。あとがきには「かつて地球上で繁栄してきた旧人ネアンデルタール人が、突如現れた新人クロマニヨン人の登場以後、急速にその数を減らし滅亡していった謎の背景には、こんな真実があったとしても不思議ではない」的なことが書かれていて、単純…いや純粹この上ない感性の持ち主だった少年時代の筆者は、これは世紀の大発見に違いない！と考えたのでした。

その年、筆者は夏休みの宿題の読書感想文に「現人類は宇宙からやってきた第2期人類か？」と題した大論文を完成させました。そして、どこでどういう事情があったのかは忘れましたが、クラス全員の前で、その感想文を発表することになりました。意気揚々と朗読を終えて原稿用紙を下ろした筆者の目の前には、当然のことながら、クラスメート全員の真顔と彼らの頭上を飛び交う無数の「？」がありました。担任の先生に「はい、梶君はとても難しい本を読んで書いてくれたみたいですね～」と軽いなされて、筆者は自分の渾身の一撃が完全な不発に終わったことを悟ったのでした。

というようなわけで、今回の「校長室だより」のテーマはSFです。筆者がこれまで読んできたSF小説を紹介していきたいと思います。過度に趣味に走った結果、読んだ人が「むむむ」と困惑してもよろしくないと思うので、SF小説としての評価の定まった、なおかつ自分が読んで面白かったなあと考えた作品をラインナップしました。それでは真夏の短夜をSF古典小説の世界に酔いしれて過ごしてください。

『2001年宇宙の旅』アーサー・C・クラーク(ハヤカワ文庫)

まずはひねり無し、大谷翔平ばりの160キロ直球ど真ん中で勝負します。『2001年宇宙の旅』といえばSFの金字塔と言っていいでしょう。この作品は、1968年、スタンリー・キューブリック監督による映画が公開され、その脚本を担当したクラークによって小説版が発表されました。その後多くのSF映画や小説が、『2001年宇宙の旅』に触発され、影響を受けて誕生したと言われています。現代のSFの礎を築いた作品といっても過言ではないでしょう。

現代では存在しない星座が夜空に輝いていたのはかな過去、旱魃が一千万年も続くアフリカ大陸の大地では苛烈な生存競争が繰り広げられていました。草原に生きるヒトザルの群れは、絶え間ない飢えと渇き、さらには肉食獣などの天敵に脅かされ絶滅の危機に瀕していました。〈月を見るもの〉はそんなヒトザルの小さな群れのリーダーです。とはいっても、柔らかい木の実や汁気のある植物の根や葉、幸運に恵まれれば時折手に入るトカゲやネズミによってかろうじて餓死を免れ、夜になると住処の洞窟に忍び寄る豹の脅威に怯えるという境遇において、他のヒトザルたちと何ら変わりはありません。

ある日、群れを引き連れた〈月を見るもの〉は、見たことのない「岩」と出会います。正面から見ると正確な長方形のその「岩」は、高さは彼の身長三倍近く、幅は伸ばした両手の先におさまるほどで、厚板のような外形をしており、完全に透き通った物質でできていました。〈月を見るもの〉は、わずかな興味を示したものの、自分たちの飢えを満たすために役に立ちそうもないと分かるとすぐに関心を失ってしまいます。ところが食物さがしを終えて、夕方またその場所を通りかかったとき、〈月を見るもの〉たちは「岩」が音を発しているのに気づきました。単純な反復の多いドラムのような音に誘われ、ヒトザルたちは「岩」に吸い寄せられていきます。直立石からは音と同時に明滅する光の渦が発せられていて、それらはヒトザルたちに無言のメッセージを伝えていたのでした。

直立石の音と光によるレッスンは毎夜続きました。やがて〈月を見るもの〉は、かつて経験したことのない感情を抱くようになります。それは、現実の生活への満たされぬ思い、遠いとりとめも

ない羨望せんぼうのようなものでした。ある日、〈月を見るもの〉はイボイノシシの群れと遭遇します。カモ牙もないヒトザルを警戒するそぶりも見せず、草を食む群れはの中の一頭のイボイノシシの頭蓋骨めがけ、〈月を見るもの〉の手に握られた鋭くとがった石が振り下ろされます。それは悠久の地球の歴史の中で、初めて道具が用いられた瞬間でした。イノシシは地に倒れ、ヒトザルの群れはその死骸を取り囲みます。やがて一匹のヒトザルが血まみれの石をうまそうになめはじめました。道具の発明は、ヒトザルたちを飢えから解放し、天敵から身を守る術を与えたのでした。

それから気の遠くなるような時間が流れました。ヒトザルは人類へと驚異的な進化を遂げ、文明を築き、ついには他の惑星へと旅をする科学力を手に入っていました。

大統領から直接の指令を受けたフロイド博士は、地上320キロメートルに浮かぶ宇宙ステーションからアリエス1B型月シャトルに乗り込み、アメリカ合衆国が月面に築いたクラビウス基地に到着します。「基地で発生した未知の伝染病の調査」という表向きの目的は、実は真実をカモフラージュするためのウソで、彼の本当の使命は、月面のティコクレーター内部の異常に強い磁気を発していた地点を掘削したところ、地下6メートルで発見された、高さ3メートル、幅1.5メートルの直立石モノリスの調査を行うことでした。何の物質でできているのかすら分からない漆黒の直立石は、表面に傷一つ無く新品のように見えたことから、当初は他国の調査隊が何らかの目的で埋めたのではないかと考えられていました。しかし、周辺の地質調査をもとに直立石が埋められた年代が特定され、その仮説が間違いであることがわかりました。直立石が埋められたのは約300万年前、地球上で人類の祖先が文明を築くはるか以前のことだったのです。それは、300万年前に地球外の知的生命体が月を訪れたことを示す動かぬ証拠でした。

フロイド博士は調査団と共に、発見されたままの状態、ティコクレーター内の地下6メートルの穴の中に立っている直立石の調査に向かいます。調査団が到着したのは、ちょうど14日間続いた月面の夜が終わろうとしている時でした。太陽が地平線から浮かび上がり、その強烈な光線が直立石を照らしたとき、フロイド博士の宇宙服のヘルメットのスピーカーから突き刺すような電子音の絶叫がほとばしります。それは、300万年を闇の中で過ごしてきた直立石が、はじめて月面の夜明けを迎えて発した「声」でした。その瞬間、宇宙空間を航行する複数の探査機が、自然現象とは明らかに異なるエネルギーが太陽系を駆け抜けていったのを感じました。直立石から放射されたエネルギーは、月からまっすぐに土星を目指していました。直立石は、人類が月の地下に埋まった物体を発見できる科学力を持つ段階に至ったことを知らせる信号装置だったのです。宇宙の深淵で耳を傾けている「誰か」に向かって…。

だいぶはしよ(というか相当)端折って書いたつもりなのですが、小説の第2部までのあらすじで1ページ以上かかってしまいました。ちなみに小説『2001年宇宙の旅』は第6部まであります。この後人類は、直立石モノリスの発したエネルギーが向かった土星の衛星ヤペタスを目指し、有人探査船ディスカバリー号を出発させます。ディスカバリー号は約10ヶ月の亜光速の旅の後、土星を巡る軌道に入り調査を行う予定でした。しかしその旅の途中、ディスカバリー号の頭脳であるスーパーコンピューター「ハル」に、まるで自我が生じたかのような異常な言動が見られるようになります。そしてついに…この先を知りたい人は、ぜひ自分で読んでください。

壮大な、という言葉で表現しきれないほど壮大な結末は、一読しただけではよくわからなくて、何度も何度も読み返した覚えがあります。キューブリック監督の映画も高く評価されていますが、あまりに難解すぎて、一回観ただけではよくわかりませんでした。自分の場合、小説版を読んで

「なるほど！」と腑^ふに落ちた部分が多々ありました。

『星を継ぐもの』J・P・ホーガン(創元SF文庫)

西暦2020年代、人類の科学は、月面に基地を築き、太陽系の惑星に有人探査機を向かわせる段階に達していました。原子物理学者で、ニュートリノ(注2)を利用してあらゆる物質を透視する装置「トライマグニスコープ」の発明者でもあるヴィクター・ハント博士は、国連宇宙軍(UNSA)本部長グレッグ・コールドウェルから突然の招^{しょうへい}聘を受けます。不審に思いながらもUNSAを訪れたハントを、コールドウェルは月面の洞窟で見つけた身元不明の男性の死体と対面させます。仮に「チャーリー」と呼ばれるその男は赤色の宇宙服を身につけており、彼が背負っていたバックパックからは超小型原子力発電機をはじめ、彼の属する社会が超高度な科学技術を持っていたことを証拠づける用途不明のさまざまな装置が発見された、とコールドウェルは説明します。依然として自分が呼ばれた理由が分からず困惑するハントに、コールドウェルは「チャーリーは現在われわれの知っているいかなる国の人間でもないのです」と告げます。「何者であるかはともかく…チャーリーは5万年以上前に死んでいるのです」

5万年にわたってチャーリーの肉体を保全していたのは、月の乾燥した大気と、洞窟内の寒冷な環境でした。チャーリーはUNSAによってルナリアン(月の人間)と名付けられます。UNSAはハントをはじめさまざまな分野の専門家を集め、ルナリアンについての調査を開始します。ハントがトライマグニスコープでチャーリーの装備品を調査した結果、チャーリーは手帳のようなものをはじめ複数の書類を所持していることがわかりました。手で触れればたちまち崩れてしまう紙面の文字を、トライマグニスコープは正確に読み取って行きます。ある偶然からその一部をカレンダーの一種ではないかと考えたハントの推理をきっかけに、言語学者たちは徐々にチャーリーの手帳を読み解いていきます。

一方で生物学の権威であるダンチェッカー博士は、チャーリーの生物学上の特徴は現在地球上に存在する人類と完全に一致しており、チャーリーは地球上で進化した人類であることに疑いをさしはさむ余地はない、と断言します。これに対してハントは、5万年前の人類は原始生活を送っており、仮に地球上のどこかにチャーリーの属する高度な文明社会が存在したとしたら、その痕跡は必ず発見されているはずであり、チャーリーが地球上で進化したという事実はあり得ない、と反論します。チャーリーの出自を巡る矛盾は多くの議論を巻き起こし、数々の仮説が立てられましたが、すべての疑問を解消する説明をできる人は誰一人いませんでした。

チャーリーの発見以後も継続されていた月面調査隊は、古代の月面基地と思われる場所で焼け焦げた複数のルナリアンの死体とその装備品を発見します。そこで発見された資料がヒントとなり、チャーリーの手帳の解読が急速に前進します。そこには、太陽系の驚くべき歴史が記されていました。

手帳には、チャーリーたちルナリアンが、火星と木星の間にかつて存在した太陽系第5惑星の住人であった事実が記されていました。UNCAが「ミネルヴァ」と名付けたこの惑星は、大きさ重力、大気の構成などが地球に酷似していたことがわかりました。しかし太陽から距離の遠いミネルヴァは地球に比べはるかに寒冷な惑星でした。ルナリアンたちは高度な天文学によって、近い未来ミネルヴァに猛烈な氷河期がおとずれ、人類(ルナリアン)はその氷河期を生き延びることができないという予測を導き出します。ルナリアンたちは宇宙船を建造し、新たな惑星への移住を

計画しますが、人類移住に必要な数の宇宙船を建造するにあたり、あいにくミネルヴァには十分な鉱物が存在しませんでした。限られた資源を奪い合うルナリアンたちの間で争いが生じ、やがてそれは惑星を二分する二つの勢力の最終戦争へと発展していきます。核兵器を思わせる超融合爆弾やアニヒレーターと呼ばれる放射線放射装置が双方の勢力によって使用されました。軍事基地は月面にも設けられ、ミネルヴァ全域が攻撃可能範囲となりました。手帳には、チャーリーが月面から赤褐色に燃えるミネルヴァを見上げる場面が書かれています。激化する戦争はルナリアンを滅亡へと向かわせ、ついには母なる惑星ミネルヴァを粉々に粉砕してしまうに至ったのです。ハントたちは、現在、火星と木星の間に存在する小惑星帯がミネルヴァの残骸である^{ざんがい}ことを理解したのでした。

地球がルナリアンの発見^わに沸いていたとき、別の調査隊が木星に向かっていました。ジュピターⅣというこの調査隊の目的は、木星の衛星群のベクトル場の合成値が示している、木星の衛星ガニメデのふ厚い氷の下に眠っている巨大な物体の調査でした。ジュピターⅣはガニメデの氷原を掘り進め、ついに目標に到達します。それは、想像を絶するほど巨大な、そして人類の知識では理解不能な高度の科学技術によって作られた宇宙船だったのです。宇宙船は何らかのトラブルでガニメデに墜落、そのままガニメデの極寒の環境が宇宙船を氷の底に閉じ込めてしまったのでした。

外壁の一部に穴を開け宇宙船の内部に乗り込んだ調査隊は、この宇宙船を建造し、宇宙を自在に旅していたであろう身長3メートルものエイリアン(注3)の複数の白骨体を発見します。驚くべき事に、このエイリアンは、ルナリアンの月面基地で見つかったミネルヴァ固有種の魚と同じ進化の系統にあることが判明します。「ガニメアン」と名付けられたこのエイリアンたちの故郷は、惑星ミネルヴァだったのです。ハントたちは、ミネルヴァではルナリアンとガニメアンという二種類の知的生命体が共存していたのではないかと考えますが、すぐにその推理は間違いであることが証明されます。ガニメアンの宇宙船が発見された氷の層は、ルナリアンが生存していたはるか昔、2500万年前のものだったからです。さらにハントたちを驚かせたのは、ガニメアンの宇宙船からは2500万年前の地球の動植物が多数発見されたことでした。それらは生きたまま捕獲、採取されていました。その中には、ようやく樹上を離れ二足歩行するようになった猿の一種、現在の人類の祖先も含まれていたのです。

なるべく分かりやすく、簡潔に説明したつもりですが、それでも「???」という生徒諸君の顔が見えるようです。もしも、サイエンス・フィクション・ミステリーというジャンルが存在するなら、『星を継ぐもの』はその代表にふさわしいでしょう。月面で発見された5万年前の人間の死体が地球人と同じ生物種であったのはなぜか？チャーリーはなぜ月面から、火星よりも遠くにあるミネルヴァが燃える様子を克明に観察できたのか？はるかな昔、ガニメアンはなぜ大量の地球の生物を他の惑星へと運ぼうとしていたのか？数々の謎が徐々に解き明かされ、最後の最後にすべての謎が結びつき、思いもよらない真実が明らかにされます。科学的根拠にもとづいて緻密^{ちみつ}に組み立てられた壮大なストーリーは、圧巻という以外に表現のしようがありません。最初に読んだとき、こんな物語を考えつけるホーガンという人はいったいどんな頭脳をしているのだろう？と本気で驚きました。

『星を継ぐもの』は、『ガニメデの優しい巨人』、『巨人たちの星』という3部作仕立てになっている

て、物語が続いていきます。自分は『ガニメデの優しい巨人』は読みましたが、『巨人たちの星』は自宅の書棚に並んだままでまだページを開いていません。この文章を書いたのをきっかけに、この夏、『巨人たちの星』を読んでみようと思っています。

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』フィリップ・K・ディック(ハヤカワ文庫)

世界最終戦争で使用された大量の核兵器は、戦争終結後も世界中に放射性降下物の灰を降らせ続け、もはや地球は太陽を仰ぎ見ることもかなわない世界と化していました。政府は惑星植民計画によって、汚染された地球を離れ火星への移民を推進します。この計画を後押ししたのが、異星の環境下でも作業できるヒューマノイド、有機的アンドロイドでした。人間同様、有機物で構築された肉体を持つアンドロイドは、外見上は人間と区別が付きません。国連法によって、すべての移民に対し、各自の希望する形式のアンドロイド一体を無料貸与することが定められました。

ただし、すべての人間が無条件で他の惑星に移住できたわけではありません。移住の条件の一つは健全な生殖能力を有していることです。放射能が遺伝子にもたらす変異により「人類の健全な遺伝への脅威」と見なされた市民は、特殊者(スペシャル)という烙印を押され、植民計画の対象から除外されます。同じく放射能の影響が脳におよび、一定の知能レベルにないと判断された場合も特殊者と見なされます。後者は俗に「ピンボケ」と呼ばれ、社会から蔑まれる存在でした。

しかし実際には、地球に残っているのは、特殊者(スペシャル)だけではありませんでした。何らかの理由で地球を離れようとしないうる適格者(レギュラー)も少なからず存在しました。サンフランシスコのアパートで慢性的な抑うつ状態の妻と暮らすリック・デッカーもその一人です。リックは警官ですが、その仕事内容はバウンティーハンター、いわゆる賞金稼ぎです。人間の僕として生まれたアンドロイドですが、高度の思考が可能な脳ユニットを備えたアンドロイドたちの中には、自我に近い感情を持ち、自由を求め、主人である人間を殺害し逃亡するケースが発生するようになりました。そのような逃亡アンドロイドを見つけ出して、廃棄処理、つまり殺害するのがバウンティーハンターの役割です。

核がもたらした死の灰により、地球上ではあらゆる動物が絶滅、または絶滅危機の状態にあります。その中で、生きた動物を飼うことは人々にとって何よりのステータスでした。特に馬や羊のような大型の動物は大変な高値で売買されています。そんな高価な動物に手の届かない一般庶民は、本物そっくりの機械の動物で我慢するしかありません。リックはアパートの屋上に一頭の羊を飼っていました。リックの顔を見ると餌をねだったり、のんびり草を食べたりしますが、実はリックの羊は電気仕掛けです。何とか本物の動物を飼いたいと願っていたリックに、願ってもない機会が訪れます。主人を殺した8体のアンドロイドが火星を脱出し、地球に逃亡してきたというのです。逃亡した8体は、ネクサス6型と呼ばれる最新の高知能アンドロイドでした。ベテランのバウンティーハンター、デイヴ・ホールデンが逮捕に向かい2体を処分しましたが、3体目のアンドロイドに、逆にレーザー銃で撃たれ重傷を負ってしまいます。そこで、その後任にリックが指名されたわけです。首尾よく残り6体のアンドロイドを廃棄処理できれば、多額のボーナスが支払われ本物の動物を飼うことができるかもしれません。リックは期待に胸を膨らませました。

ジョン・イジドアは、かつては数千人が居住した、そして現在は巨大な廃墟と化したビルの一室にたった一人で住み着いています。住民たちのほとんどは地球を離れ、他の惑星に移住してしまったのです。イジドアは精神機能テストの最低基準に合格できなかった「ピンボケ」の一人で、地球外への移住は認められませんでした。ちゃんとした職業を持っています。それは模造動物修理店の集配用トラック運転の仕事です。ヴァン・ネス動物病院(とはいっても扱うのは電気仕掛けの動物ですが)の店主ハンニバル・スロートが彼を人間なみに扱ってくれることにイジドアは感謝を覚えています。

イジドアは空虚な気持ちに耐えられなくなると、共 感^{エンパシー}ボックスの前に立ちます。スイッチを入れ取手を握ると、視覚像が凝結し、雑草がまばらに生えた砂漠の風景が目の前に広がります。太陽のない空はどんよりとくすみ、茶色一色の荒れ果てた登り坂を、ひとつの人影が苦しい足取りで登っていきます。色あせた、ぼろぼろのガウンに身を包んだその老人はウィルバー・マーサー。マーサー教の教祖です。マーサーを見つめるイジドアに不可解な転移が起こります。イジドアはいつのまにか肉体的、精神的にウィルバー・マーサーと融合し、坂道を登っています。坂の頂上にはるか遠くで終点は見えません。すると、ふいにどこからか石ころが飛んできて彼の腕に命中します。痛みを感じて振り向くと第二の石ころが体をかすめていきます。「神様」とイジドアは考えます。なぜこんなふうにひとりぼっちで、姿の見えないやつらにいじめられなければならないのですか？すると彼の内部で無数のざわめきが起こります。それは、それぞれの共 感^{エンパシー}ボックスの取手を握り、融合に加わっている全員の声です。きみたちもそう感じるんだね、とイジドアが思うと、そうだよ、とその声が答えます。

やがてイジドアは共 感^{エンパシー}ボックスから手を離します。石が当たった腕からは血が流れています。そのとき、イジドアは無人のビルの一室からテレビの音が聞こえてくるのに気づきました。誰かが引っ越してきたんだ、もう、ひとりぼっちじゃない。イジドアは喜び勇んで音のする部屋を訪ねます。その部屋にいたのは、プリス・スラットンと名乗る、何かにひどくおびえた様子の、風変わりな若い女性でした。

リックは6体のアンドロイドのうち、まずはポロコフという名の一体に狙いをつけました。ポロコフはデιβ・ホールデンを出し抜いて重傷を負わせた危険な相手です。バウンティーハンターはアンドロイドらしき相手に遭遇した場合、相手がアンドロイドなのか人間なのかを識別しなければなりません。そこで用いられるのが、フォークト=カン^{エンパシー}プ感情移入度検査法です。どんなに精巧に作られたアンドロイドでも、人間のように他者に感情移入することはできないとされています。他者の感情に共感する能力は人間に限られた特権である、という考え方がこの検査法を成立させています。フォークト=カン^{エンパシー}プ検査法では、相手にいくつかの質問を投げかけ、その感情に反応が表れたか否かを、眼球のわずかな動きや毛細血管に流れる血液の量から判定するので

リックは、世界警察機構の捜査官になりすましたポロコフを始末し、さらに2体のアンドロイドを廃棄処分します。その3体目はルーバー・ラフトという、オペラ歌手として知られた若い女性型のアンドロイドでした。オペラ劇場に向かったリックは舞台上でモーツァルトの「魔笛」を歌うルーバー・ラフトを見ます。その美しさと歌声のすばらしさにリックは驚かされます。一旦はルーバー・ラフトの準備した罠にかかったリックですが、その計画を見破り、アンドロイド殺しを心から楽しむバウンティーハンターのレッシュとともに、展覧会でムンクの「思春期」に見入っていたルーバー・ラ

を理解し、世界に意味を付与し、さまざまな感情を経験するための枠組みを与えてくれます。事実、私たちはいつの時代も常に物語とともに生きてきました。物語を通じて、私たちは自分が何者であるのかを知り、自分の生きる場所を築いてきたと言えるでしょう。

人間の想像力を制限なく羽ばたかせることで生まれるSF小説は、ある意味、最も物語性の高い物語といえるかもしれません。今回の校長室だよりをきっかけに、君がお気に入りのSF小説と出会うことができれば大変うれしく思います。(終)

注1) よい子は真似しないように。

注2) 素粒子の一種で質量が非常に小さい。宇宙に大量に存在し、ほとんどの物質と反応しないため、物質を通り抜けて移動する性質を持つ。

注3) 宇宙人。地球外生命体。

注4) ユートピア(理想郷)の対義語。暗黒の世界。反理想郷。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。